

## 成果の説明書

(氏名) 岡村晃子	(学部) 経済
<p>1 重要事項</p> <p>口頭発表</p> <p>Akiko Okamura (2023) A longitudinal look at the contribution of positive emotions, self-regulation and motivation to achieve high test scores. Stockholm University, English Language Seminar, 30 January.</p> <p>上記の発表は授業で実施したテスト結果から学生を成績により 3 つのグループに分けて授業の楽しさ、意欲、授業外の自主学習とのつながりを調べた研究結果報告である。今回の研究に至った理由は、これまでは教員が実施した Dictation tests を 3 つのグループに学生を分ける際に利用していたが、その分け方を変えて調べる必要が見えてきたことによる。それは、Dictation tests と Recitation tests の結果をみると Recitation tests のほうが、全体的に平均点が高く、学生間の差も少なくなっていた。そのため、本年度は 2 つのテスト結果 (Dictation &amp; Recitation) を生かして主成分分析によって 3 つのグループ(High, Mid, Low)に分けた。</p> <p>結果として、Dictation tests のみによる分類の場合は Mid (中間点層) の group は意欲が下がっていたが、両方のテスト結果を考慮した場合は、このグループの意欲には変化がなかった。言い換えれば、テストの結果はどちらの方法を採用しても、後期に楽しさは全レベルで増加となったが、意欲が上がったグループは high (高得点層) だけであった。前回同様に学習効果を出すためには、自主学習につながる楽しさと意欲の両方が授業で必要であることが明らかになった。</p> <p>また、発表には至らなかったが研究の延長線上の 2 つのデータ分析も実施した。1 つは Recitation を一年間で 8 回録画、提出する課題からの学生の英語音声の向上を調べたものである。そのため、音声の最初と最後の課題の音声評価を London 在住の英国人音楽家 2 人に理解度、発音について点数だけでなく、詳細なコメントによる評価を依頼した。対象となった学生は recitation (1 分ほどの暗記の録画) を 8 回全て提出している学生ということで、3 クラス 63 人の学生のうち約半数の 32 人である。結果として、32 人のうち、24 人 (75%) の学生が 2 人の評価者から発音が向上と示された。発音向上がこの課題の目的ではなかったが、英語を暗記する程度に繰り返すということで、全体の音声が向上したといえる。</p> <p>発音へのコメントの点では、日本人の苦手とする発音 (L,R,T,D, Th など) がほとんどの学生に指摘されていた。Th は World English の視点からは強調しなくてよいという立場が主流となっているが、英語話者にとっては、th の音は頻繁に使われる音で、重要な発音とみられているようであり、授業で扱う必要を感じた。</p> <p>もう一つの取り組みは学生へのインタビューである。2022 年度もわずかではあるが、10 人ほどの学生に授業の課題とテスト (Recitation, Dictation, 自己の Listening の問題点の分析) に対しての英語学習への効果を聞いた。結果は昨年度をさらに支持する結果となり、時間をかけて取り組んだ学生ほど、Recitation の評価が高かったのが興味深かった。</p>	
<p>2 その他の事項</p> <p>ローテーションで分担している英語部会の部会長を担当した。この経験により、情報セン</p>	

ター、教務、総務と事務方との情報交換の大切さ、言葉の使い方によって、誤解が生まれる危険性を学習した。心がけたことは、できるだけ早めに対応、情報を多くの関係者と共有することであった。

### 3 次年度以降の計画・抱負

口頭発表で終わり、論文にまとめられない時期が続いているので、来年度は論文にまとめたい。また、上記に挙げた現在進行形の2つの取り組みをアンケートでは見えない、英語話者からの評価、学生の視点からの自己評価という複数の視点から書ければと思う。